



その想い



第8号

発行人：谷泰智
29年6月7日発行

★奉音供養会（久乗おりんのコンサート）盛況に開かれました。



当日の本堂には総勢48名の方々がお見えになりました。外は5色のキャンドルで彩られ、祈りと癒しの一晩となりました。

4月22日、富山県高岡市より谷中ご夫妻をお招きし、本堂にて久乗おりんとコントラバスの生演奏を奉納していただきました。護国寺縁故の諸靈位への鎮魂の手向けとして、またその場を共有する人々の癒しとして、おりんが奏でる優しく深い大悲の音色が本堂に響きました。

近年はお堂でのコンサートは珍しくなってきましたが、前々から私には「お堂は箱物ではない。」という思いがありました。しかし、今回演奏していただいた『久乗おりん』は御仏壇で使う仏具に音階をつけた楽器ですので、今回は奉音という形で企画致しました。是非次回も企画して参りたいと思います。



★ 献茶彼岸会のご報告

昨年に比べ少し参加人数が少なかったですが、茶道の先生のご尽力の甲斐あって、今年も無事営むことができました。

お菓子は昨年と同じく、護国寺の総本山である聖護院に縁の深い西尾八ツ橋のチョコレート。加えて、家内の自家製『文旦の皮の砂糖漬け』をご用意しました。

昨年元気に参加して下さっていたにも関わらず、今年はもう鬼籍に入ってしまった方もいらっしゃり、改めて諸行無常を思い至りました。今この一瞬を大切に、喫茶來の意味が少しづつわかった気がしました。

★ 佛教青年会による『お花まつり』

5月8日県民文化ホールにて、釈迦宗さんをお招きしての『お花まつり』が開催され、私もお手伝いに参加させていただきました。

『お花まつり』とはお釈迦様の聖誕された場所が大変美しく花が咲き乱れる場所であったことから名付けられた、降誕会とも呼ばれる佛教行事です。

宗派の垣根を越えて、互いに学びあうことのできた有意義な一日でした。

お釈迦様（誕生仏）に甘茶を注ぎます。→法要が始まる時に空中に投じる散華。↓



★回りて向かう ~戒名の話し(前半)~

ズバリ、皆さんは戒名の意義についてご存知でしょうか?戒名という言葉自体、近しい方の通夜葬儀の場でしか口にしないのではないか?そして、耳にするのは時折世間で問題視される「坊主丸儲けの高額な戒名料が・・・」なんて話題ではないでしょうか?

普段、檀家様のお葬儀にあたって、なるだけ戒名の説明は致すように心がけているのですが、御遺族の方々がバタバタされた中で、此方の趣意を伝えるにはかなり厳しいものがあります。是非この機会に、皆さんの意識をより高めていただけたら幸いです。

そもそも仏教には戒・定・慧の三學という柱がありまして、この三つを確かに治めていくことが真に実践的な意味で仏教を学ぶということになります。定と慧について短く先に説明すると、それぞれ禪定(瞑想)と智慧のことです。

本題である『戒め』という字は、あくまで自律的な働きかけを意味します。つまり、何かの戒めを破ったからといって罰則が課されるわけではなく、「なるべくそうしていこう。」という前向きなものです。これに対して、律という字は、それを破ると罰則が課される受動的なもので、法戒とは言わず法律と言われるのもその所以です。

出家をして仏門に入り僧侶になる為の儀式の事を『得度』と言いますが、日本では古くからこの得度の時に、大乗戒(具足戒に始まり後に各宗派それぞれで集約されたもの)の授受が行われてきました。加えて、その場で『法名』という僧侶としての名前も師匠や戒師から新たに授けられます。

こうして、現代の宗派仏教の多くは、檀信徒が亡くなった後の通夜や葬儀の中で、この得度の儀式を営んでいるのです。

ということは、あくまで日本の場合ですが、在家の仏教徒を弔う葬儀とはつまり故人に急いで僧侶になってもらっている儀式であるとも言えます。ならば詰まるところ、戒名とは原則的に故人の法名ということになります。さらに逆に言うと、生前戒名とはつまり得度を受けることに等しいと言えるのです。

このことが重要な論拠とされ、それ故に戒名には大変な重きが置かれているのです。しかし一方でそれは、あくまでも日本の宗派仏教側の論理であり、それを笠に着て、一生一度の葬儀の場で十分な説明も無く、「大変有難いものだから」と頭ごなしに敷居を上げられてしまうことが、世間の困惑を招く原因になっています。

冒頭で述べた『戒名料』というものにも、賛否両論が投げかけられています。一般的な檀徒の方々と宗派仏教、その両者の信頼関係の中で戒名料というものが認識され、尚且つ相互に合意されているのであれば問題は無く、むしろそれは篤信の顕れであるとも言えますが、檀徒側が上で述べた背景を理解し得ない場合には、戒名料という概念自体が成り立たないと私は考えます。

戒名料については同じ宗派の中でも、僧侶一人一人の考え方や檀信徒の方々の想い、さらには地域性によって見解が分かれますので、その良し悪しについて答えは出せません。ちなみに、現在の護国寺では戒名料は頂いておりません。

次号では後半として、その種類、字の選ばれ方、院号、などの具体的な話題について、私見を交えながら説明したいと思います。



✿お供えのお花について

一般的に、仏前には檻(シキミ)神前には榦(サカキ)とされています。檻も榦も年中色褪せず、特別な栽培をしなくても昔から人の生活の側にありました。そしてそのような利便性から、日常の宗教的営みの中で古くから選ばれてきたようです。

しかしながら、檻の実には猛毒の成分が入っています。バラなどのとげのある花をタブーとする論理ならば、猛毒の植物をお供えするのもまずいのではないか?と思いませんが、ほとんどの僧侶はそんなことは問題にしていません。仏花の活け方などのしきたりも確かにあるのですが、ご家庭の御仏前であればあまりこだわらず、地味でも派手でも、故人様が喜びそうな花が一番ではないでしょうか・・・。

 ※一般的な位牌の例	④ 石森院漫徳章現居士 <small>セキリンインマントクショウゲンコジ</small>	③ 露伴居士 <small>ロバンコジ</small>	② 貫天院殿純義誠忠大居士 <small>カンテンインデンジュンギセイチユウダイコジ</small>	① 勝満 <small>ショウマン</small>
※様々な戒名の例				

★檀家さんに聞く



先代の北添茂さん



佐川町の斗賀野にある古民家を改装したアジアン雑貨とカフェのお店サードアイ。今回はそのお店の店主であり、またマーダルサンガのリーダーも務められている北添紫光さんを紹介します。

マーダルとはネパールの民族楽器の両面太鼓、そしてサンガとは仏教から生まれた言葉で『協同して事を成す集まり』の意味です。このマーダルサンガは日本で唯一、マーダルを叩きながら歌い、年1回の発表会を開く、熱いワークショップです！

今年は7月16日（日）14時～
桜座にて 前売り2000円です



2016年のコンサートの様子

打楽器演奏者として長年活動してた親父が、仕事の依頼を受けて滞在してたネパールでマーダルに出会ったのがそもそもの始まりなんやけど、まあ、物事にはやっぱり『流れ』ってあるんよねえ・・・。

親父がここで店をやりだしてから、いろんな人が興味を持って集まってくれるようになったのよ。そして次第に、近所のおんちゃんおばちゃん達が店の奥でバチ持てダッタカダッタカ、リズムの基礎練習をするようになって。(笑) それも皆音楽的にはプロを目指している訳ではないのに。

でも、やっぱりリズム練習だけやと飽きる、そこで親父が皆に勧めたのがマーダル。もともと親父には「ドラムを叩きながら歌つたらええやん。」って発想があったからね。で、叩いて歌って楽しくやってたら誰かが「私の好きな曲も皆でやりたい！」ってなってきて「それじゃ皆さんに聴いて貰おう！」ってことで早や17年。親父はそういう『流れ』に身を任せたのかなって、僕が親父のあとを継ぐ今になってはそう思う。



やっぱり、やりたくてやってる姿を見せたいね。僕がしんどがったら終わるのよ。でも、しんどくないのよ。それは、人が集まること、続くこと、そしてそれらが素敵な事などと気づいたうちの親父みたいな人がいて、その気持ちを受継いでくれた生徒さんが居てくれて・・・。

今の僕が12年前（茂さんが倒れた）に戻ったら、逆にもがき過ぎて潰れたかもしれません。程よくもがいて、程よく挫折して、程よく成果を得ての12年やったき、一回りグルーっとして、「うん！」っていう自分の領きと共に何か解った気がした。でもそういうのを全部ひっくるめて、やっぱ『縁』かなって思う。

TEL 0889-22-0846

コーヒー&紅茶は全てネパール産
13時～17時営業 火曜定休



文化・芸能・宗教などの目に見えないけど確かに存在してるものが、今までの状態のままでは生き残るのが難しくなってる現代の状況、僕らはそれを悲観的に捉えるんじゃなくて、むしろ今こそ、音楽で人の心を感化したり、仏教でも説法で人に勇気を与えてたりとかで、積極的に具象化していくべきなんじゃないかな？

例えば、気分の沈んでる人がパーンとコインを置いて「なんか音楽で気分上げてえ。」って言われてガッと演奏して「あ～なんか楽になったわ！」って音楽の力を実感してもらえるような。仏教でも、懺悔とか相談に来る人の間口をもっと広げて、経典の中から適宜引用しつつアドバイスして「あ～楽になりました！」とか言ってもらえるような。そんな素敵なことを起せるよう、お互い挑んでいきたいよね。(笑)

「これは僕にしかできんことながって！」、そういう気持ちを持つことが大事じゃないかな。♪マーダル始めてみませんか？随時募集中(^^)



お経のことば

尊者シャーリップトラよ、私は決して何かを獲得したのでも、
覚ったのでもありません。 (中略) このように、『われわれ
は獲得している』、あるいは『覚っている』という思いを生
じるところの人たち、それらの人たちは、慢心あるものたち
と言われるのです。

維摩經 観衆生品第7
訳 植木雅俊

仏教伝来の頃、聖徳太子もその解説書を著したとされている維摩經は、禪問答の発展に大きな影響を及ぼし、また武者小路実篤などの近代の文豪にも深い感銘を与えた大変有名なお経です。

正確な成立年代については不明ですが、おそらく2000年ほど前にできたお経で、西暦250年頃には最初の漢訳がなされています。

さて、今回のお経のことばですが、実は上に紹介しているものはお釈迦様の言葉ではなく、ある天女がお釈迦様の一番弟子の舍利弗 (シャーリップトラ) に対して言ったものです。

まず維摩經の大まかな構成を説明しますと、そもそも維摩居士とは豊富な財力をもとにそれを貧しい人々のために活かし、貴賤の区別なく様々な人に仏教の感化を起すべく奮闘していた、正に大徳を備えた在家の佛教者です。

ある日、維摩居士は敢えて病に臥せたという方便をとります。そしてその意図がお釈迦様にもテレビで伝わって、お釈迦様はすぐさま舍利弗以下10人の弟子達を見舞いに向かわせるのですが、実は以前に維摩居士はその10人を悉く論破していました。10人ともそれがトラウマの如くでありますとして、結局誰も見舞いに行けない次第なのです。

続いて、弥勒菩薩・光嚴童子・持世菩薩・長者子善徳などにも声がかかるのですが、やはり先の10人と同じなのです。そこで最後は、智慧の菩薩とも呼ばれる文殊菩薩が向かいいます。そして、床一つしかない空っぽの小さな部屋にはあらゆる世界が内包され、言語と理性の限界に迫る、摩訶不思議な究極の問答が織りなされるのです。

その空っぽの小さな部屋には不思議にも何百万の見物人が入ることができ、その中に天女と舍利弗は居たのです。そして上の言葉の核心はつまり、空 (くう) を表しているのです。

舞台となっている維摩居士の不思議な部屋は、実は空っぽではなくて空 (くう) なのです。空とはつまり無限の可能性のことであり、その中ではあらゆる対比は意味をなさなくなります。空の中では、「私が何かを見る」というその構造、つまり『私』と『何か』という分別がすでに慢心なのです。

例えば日ごろ我々が忌避している悪しきものと判断された諸々、それらは先の通り、不確定の『私』によって不確実な『何か』に仮に意味付けされているに過ぎません。たまには忌避する前に少し止まって、悪しき諸々の本性を見つめてみる、何がどう悪いのかを冷静に考えてみる、そんな『促し』はいかがでしょうか? 俗人成仏の理想を説く維摩經は、俗世に向き合ってこそその佛教を説いています。

お知らせ

- 7月16日（日曜日）マーダルのコンサート
佐川町の桜座にて、午後2時から。住職も叩いて歌います♪😊
- 9月20日（水曜日）法話・彼岸会・千体流し
法話では、住職が富士山修行の体験を語ります。
- 毎月28日 柱源護摩供
柱源護摩供は午前9時と午後3時の2回、参加費等無料です。

※葬儀が重なると変更される場合があります。

本山修験宗 大瀧山 護国寺
781-2155
高知県高岡郡日高村九頭291
☎ 0889-24-7244
ホームページ gokokuji.site
仏事に関してのお悩み、ご質問、
行事に関するお問い合わせ等、
お気軽にお電話ください。

